

全校生徒の皆さん、おはようございます。

冬季休業明けの全校集会は、今回も校内放送を用いて校長からお話をします。

年が改まり、令和4年最初の挨拶になるので、やはりこの言葉から始めましょう。「新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いします。」そして、牛乳をたくさん飲んでくれてどうもありがとう。どうやら、廃棄処理の危機は切り抜けたようです。次回のピンチは春休み期間になりそうです。その時もどうか協力してください。さて、冬休み期間に行われた、砂川小学校・北光小学校での学習ボランティアに参加してくれた皆さん、ありがとうございました。両小学校の校長先生より、とても丁寧なお礼の言葉がありましたが、高校生の側にとっても自分を成長させる良い経験になったと思います。これからも継続をよろしくお願いします。

では、今日の話題に入ります。

砂川市にはいわた書店という本屋さんがいます。この店主である岩田徹さんが、昨年の12月に出版した本を今日は紹介します。本のタイトルは、『一万円選書 北国の小さな本屋が起こした奇跡の物語』というものです。＜下線部を各教室で担任が板書＞

注文を受けたお客さんに合いそうな本を、10冊程度、総額1万円分を選んで郵送するという独自のアイデアが誕生した様子を著した本です。私はさっそく2冊を購入し、そのうち1冊には岩田さんから、「砂川高校へ」というサインを書いてもらいました。この放送を終えたあとは、本校の図書館にずっと置いておきますので、ぜひ手に取ってご覧ください。

この本を読み始めてまず驚いたのは、読書がそれほど得意でない者にも読みやすく書かれていたことです。岩田さんに、「いやあ、読みやすい本だった」と感想を伝えると、「そりゃそうだ、中学生にもわかるように書いたから」と返ってきました。まるで、自分のレベルが見透かされてしまった感じがありましたが、読書習慣の有無を問わずに楽しく読める本です。

世の中が急速に変化している時代において、人工知能 AI にも代わりができない仕事、自分にしかできないものをつかんだ岩田さんのお話を通じて、やりがいのある仕事との出会いは無限に広がっており、さらに、それは遠く離れた場所ではなく身近なところにあ

る、ということを教えてください。だから、ぜひ皆さんにお薦めしたいと思いました。

このまちに住む者にとって、いわた書店が全国から注目されるのはとても嬉しいことです。さらに、先日新千歳空港の出発口搭乗ゲートを見ていたら、何と7人に1人の割合で北菓楼のお土産袋、あのオレンジ色の紙袋を下げた人が並んでいることに気づき、何だか誇らしげな気持ちになりました。砂高愛は当然のこと、砂川愛もたっぷり持っている私です。

さて、そんな私から、君たちへの質問があります。「砂川高校への誇りをしっかりと持っていますか。」特に、3年生の皆さんには、あと1ヶ月半後に待つ卒業式までに、この答えをつかんでください。

＜下線部を各教室で担任が板書＞

先ほど私は、人工知能 AI にも代わりができない仕事、と表現しましたが、この砂川高校で過ごす3年間は、当然ながら AI では置き換えられないものです。思いっきり、全力で高校生活を充実させたい生徒と、その思いを叶えようとする先生・職員の方々の熱意が込められた3年間は、一人ひとり違うかたちで心に刻まれる。それが砂高であり、私の砂高に対する誇りのひとつです。

卒業式で流れる校歌の2番最後に、「ああ砂高 誇らしく」との歌詞があります。当日、大きな声で歌えるかはまだわかりませんが、胸にぐっとくる瞬間となるよう、3年生の皆さんに問いかけました。私から上げたトスを、どうか気持ち良いスパイクで打ち込んでくださいね。

結びに、校長として私から君たちに語り続けてきたことを振り返ります。まず2年前には、「自分で考え、自分で判断し、行動する」つまり、主体的な生徒になってほしいと何度も伝えてきましたね。次に昨年からは、何が善いことで何がそうでないことなのか、自分を律することができる人間になってほしいと伝えていきます。そして、今年それらの集大成として、何度も語る言葉はこれです。「砂川高校への誇りを感じてほしい。」社会で活躍している卒業生たちの胸には砂高への誇りが刻まれています。放送を聞いている君たちも、どうか在学中に、制服を着ているこの時期に砂高への誇りに気づき、感じてください。

私は、砂高の教員としての誇りも、砂高の教頭だった時の誇りも、今、砂高の校長としての誇りも、いつだって忘れることはありません。